

## 第2回(平成20年度)栃木県元気な農業コンクールいきいき農村部門受賞者紹介

### ☆ 農村活性化の部

#### (1) 審査経過

今年度の栃木の元気な農業コンクール（農村活性化の部）には各地から8事例の応募がありました。いずれも地域ごとの個性にあふれ、参加者の元気な様子がよくわかるものでした。

審査委員会では次の四つの視点から各事例の審査を行いました。

①自主的努力と創意工夫、②合意形成、③推進体制の整備と運営、④地域農業振興や活性化への寄与、この視点にもとづき、5人の審査委員が点数をつけ、その合計点と順位点とを勘案し判定を行い、さらに必要に応じて一部現地調査を行い、各賞を決定致しました。

#### (2) 審査講評（受賞組織の概要）

##### ○ とちぎ元気大賞（関東農政局長賞・栃木県知事賞）

###### 作原地区むらづくり推進協議会（佐野市）

山間部の行き止まりの集落で、蓬山ログビレッジを拠点として農村レストラン、直売所、都市農村交流施設の運営を長期にわたって持続的に行ってきました。集落ぐるみで活動に参加し、自治会、山林会、小学校育成会、老人会など地域の組織とも連携して活発に活動を行っています。女性の働く場づくりも意識しており、ボランティア精神と経営性の両面から、地域をきちんと見つめた内発的発展による活動が、非常に高く評価されました。



##### ○ とちぎ元気賞（栃木県知事賞）

###### 静和地区ふれあいの郷づくり委員会（岩舟町）

地域活性化の拠点として農産物直売所をつくり、農産加工や周辺の公園化による憩いの場の形成など多面的な活動を行っています。小さな直売所であるがゆえの特徴を生かし、アットホームに仲良く、多くの方々の参加により地域活性化に貢献している点が高く評価されました。



## ○ とちぎ元気賞（栃木県知事賞）

### 観音山梅の里づくり協議会（市貝町）

タバコ栽培の衰退後広がった耕作放棄地対策として、梅の木を植え、それをきっかけに地域が一体となって環境整備や加工品開発に取り組んでいます。全県的に農地の荒廃化が懸念される中、耕地面積を増やししながら地域の活性化を図っていくという教訓的な実践である点が高く評価されました。



## ○ 特別賞（栃木県農業協同組合中央会長賞）

### 玉田集落営農組合（矢板市）

集落営農として農地の効率的な活用や、水田アートを契機とした環境整備活動を、自ら旗印を立てて、手づくりで、楽しく、美しく行っており、アピール力が大変強く、集落営農組合と環境を良くする会との協力関係も含めて、今後の活動に期待が持てる点が評価されました。なお、本実践例は、農協組織が積極的に取り組んでいる集落営農を母体とした活動であるという点から、特別賞の中の農協中央会長賞をあたえるのが適切であるという点から選定されました。



## ○ 特別賞（下野新聞社長賞）

### 清原南部明るいむらづくり推進会議（宇都宮市）

都市近郊農村にあつて、農産物直売所の運営や作付作物の選定など販路拡大をきちんと視野に入れた活動を行っており、若手や女性の参加のもと、地域住民との交流のイベント、農業体験ツアーの実践など、貴重な経験を提供している点が評価されました。



まがみ

### 真上の郷づくり協議会（西方町）

耕作放棄地が増加し、集落のコミュニティ機能が低下する危機感が出てきている中、小さな集落が全戸一丸となって、梅の植栽、梅の加工、木炭製造など多彩な取り組みを行っており、農商工連携のモデルともいえ、小さな集落の実践ではあるが未来への広がりがあることが評価されました。



なお、特別賞の中の下野新聞社社長賞は、都市と農村をつなぎ地域の活性化を支援するという新聞の役割とこの二つの実践が良く適合するという点から選定されました。